
Scientific Approaches to Language No.11

March 2012 the Last Issue

はしがき—CLS 収束に際し—

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要Scientific Approaches to Language (SAL) 第11号をお届けします。1年前に、「SALは、CLS発足の初年度（2001年度）に第1号を刊行しました。それから、10年、無事に第10号を刊行できること、大変嬉しく思います」と「はしがき」に書いたばかりなのですが、ひとつ、残念なお知らせがあります。CLSは、その発足から11年を経ました今年度(2012年3月)をもって、（以下で触れますが）新たな組織に生まれ変わることになり、本紀要SALも、今号をもって「期間限定のない」休刊となることになりました。長い間、ご購読下さりありがとうございました。

SALは、お陰様で、小さな研究所の紀要としては、（手前味噌ですが）比較的評判もよく、国内外の学会や学術誌に収録論文が引用されているのを目にすることも多々あり、そうしたことが励みになり、毎号200頁（時には、本号のように300頁）を越える論文集としてお手元にお送りしてきました。執筆者のほとんどは、本学教員、本学大学院修了生（同時にCLS非常勤研究員）、本学大学院生、CLSで支援する公的資金による研究プロジェクトの研究者ですので、SALを通して、本学（特に大学院）における言語学・言語教育関係の研究内容と成果が発信されてきたことになります。また、本学を修了し、他大学の教員として活躍している「本学の元大学院生」も、本紀要へ寄稿することで、改めて本学で受けた教育と研究からの自らの成長を確認する機会としてくれていたようです。そして何より、SALを毎年受け取られ、論文に目を通して下さる方々がいらっしゃるものが、ほぼ毎年寄稿することを心がけていた、センター長の私、顧問の井上和子先生はじめ、大学院教員、CLS所属の研究員、非常勤研究員の論文執筆への大きなインセンティブでした。この場を借りて、お礼申し上げます。

本号は、（取りあえずの）「最終号」となることから、多くの寄稿が寄せられ、言語学関係で10編、言語教育関係で6編と、収録論文数、総ページ数ともに、これまでで最も「多数」で「厚い」ものとなりました。また、そのバリエーションも豊富で、＜言語編＞では、理論研究、記述研究、言語エッセイ、扱う現象も、文構造、意味と統語の接点、語形成、日中対照、方言など、＜言語教育編＞では、理論と実証、実践の観点から、児童英語、日本語教育、学習者の言語知識、タスク教育、プログラム評価など、多岐にわたり、CLSが支援する言語研究の幅と裾野の広さを示すことができたものとなりました。「最終号」として誇れる内容のものとなったと自負しております。ご高覧いただければ幸いです。

以下では、CLS活動全般を振り返り、最後にCLS後の「新組織」について記させていただきます。

CLSは大学院（言語科学研究科）に附置された研究組織で、その設置目的は、その前身のCOE研究の課題（言語理論の構築と多角的な実証）の追求を引き継ぐと同時に「大学院における研究と教育に資する」ことで、大きく分けて、以下の3つを中心に活動してきました。

- (A) 大学院教員・CLS研究員の科研費などの「公的外部研究費」の獲得、遂行、運用支援。
- (B) 「言語科学」研究、および(A)と関わり、広く、言語学と言語教育学の研究教育の基盤形成と発展に資する「研究会（コロキウム）」「講演会」「ワークショップ」「シンポジウム」などの開催、および、そうした成果の公表を] 含めた紀要（SAL）の刊行とホームページの整備。
- (C) 大学院生、修了生、CLS研究員への教育と研究支援。

(A)については、CLSでは、以下の公的資金による研究プロジェクト〔総額(直接+間接経費) 116,000千円余(予定を含む)] を支援して参りました。大学院専任教員は6名（現在は5名）、CLS専任研究員は1名と限られた中では、常に数本のプロジェクトが進行しており、(A)の活動はCLSの活気の源であり、その研究レベルの高揚・維持に大きな役割を果たしてきました。資金獲得にご尽力下さり、質の高い研究を継続的に追求して下さいました先生方に御礼申し上げますと共に、今後の更なるご活躍、ご健闘をお祈り致します。

日本学術振興会 科学研究費補助金

- ・ 2002年4月～2005年3月、基盤研究（B）『テキスト理解と学習—テキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について—』（課題番号：14380119）（研究代表者：堀場 裕紀江；研究分担者：長谷川信子、井上和子、小林美代子）
〔総額10,900千円〕

- ・ 2003年4月～2006年3月、基盤研究（C）『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』（課題番号：15520293）（研究代表者：木川行央）
〔総額3,300千円〕
- ・ 2004年4月～2007年3月、基盤研究（B）『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（課題番号：16320075）（研究代表者：小林美代子；研究分担者：長谷川信子、堀場裕紀江、田中真紀子、原岡笙子）
〔総額13,400千円〕
- ・ 2007年4月～2010年3月、基盤研究（B）『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（課題番号：19320063）（研究代表者：長谷川 信子；研究分担者(2008年4月より)：遠藤喜雄）〔総額10,400千円〕
- ・ 2007年4月～2010年3月（2009年10月より熊本大学へ移管）、基盤研究（B）『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（課題番号：19320085）（研究代表者：小林美代子；研究分担者：宮本弦、田中真紀子、長谷川信子、堀場裕紀江）〔総額14,277千円(本学での執行分)〕
- ・ 2008年4月～2011年3月、基盤研究（C）『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（課題番号：20520552）（研究代表者：神谷昇；研究分担者：長谷川信子、小林美代子）〔総額3,640千円〕
- ・ 2008年4月～2012年3月、基盤研究（B）『語彙とテキスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について』（課題番号：20320073）（研究代表者：堀場裕紀江；研究分担者：岩本遠億、木川行央）〔総額19,370千円〕
- ・ 2009年4月～2012年3月、基盤研究（B）『談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して』（課題番号：21320079）（研究代表者：遠藤喜雄；研究分担者：長谷川信子）〔総額9,880千円〕
- ・ 2009年4月～2012年3月、基盤研究（C）『首都圏方言の実態に関する基礎的研究』（課題番号：21520478）（研究代表者：木川行央；研究分担者：久野マリ子）〔総額4,290千円〕
- ・ 2011年4月～2014年3月、基盤研究（B）『述語の意味と叙述タイプに関する統語論からの考察：機能範疇統語論の構築を目指して』（課題番号：2332089）（研究代表者：長谷川信子）〔総額5,590千円(予定)〕
- ・ （独）科学技術振興機構 委託研究
2004年12月～2009年11月、研究領域：「脳科学と教育 タイプ（II）」研究課題：「言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究」（研究リーダー：萩原裕子（首都大学東京））本学担当研究題目：『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』（研究機関代表者：長谷川信子；研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）〔総額21,420千円(本学担当分)〕

(B)については、SAL毎号の巻末（およびCLSホームページ）に、研究会関係の情報を記載し、日時、講演者・発表者とタイトル、開催イベントの趣旨と要旨などをお知らせしてきました。ここでは、件数を述べるに止めますが、11年間で、数も内容も大変実りの多いものとなりました。多くのイベントが、その時進行中の(A)の研究プロジェクトとの共催となっており、(A)の研究課題とCLSの活動が互いに相互に連携し、恩恵を与え合っていたかがお分かりいただけると思います。

- ・ コロキウム、研究会（1, 2名による講演・研究発表） 31回
- ・ 講演会、レクチャー、セミナー（特定トピックでの専門家による講義など、教育的示唆を含むもの） 11回
- ・ ワークショップ、フォーラム、シンポジウム（テーマを絞り数人以上の講演者・発表者によるもの） 12回

こうした研究会に加え、本紀要（年刊）の公刊、科研による報告書の公刊、ホームページでのイベントのお知らせや活動報告など、日常的に研究を支援して来ました。(B)の活動は「種蒔き」の役割を果たしますので、CLSとしての活動は収束しますが、その影響の今後への波及・発展を信じております。

そして、(C)は、CLS顧問の井上和子先生を囲んでの研究会（通称「井上ゼミ」）や科研の遂行に関わる少人数での集まり（「科研サロン」「XX（研究代表者の名字）科研会議」など様々な名称が用いられています）などが該当します。こうした活動は「形」としては残りにくいですが、大学院生や修士生、若手研究者にとっては、正規の授業や講義では学ぶことのできない、しかし、研究者としてのキャリアの礎となるノウハウ（研究を遂行するとはどういうことか、どのように遂行の手順を踏むのか、など）を獲得し、意見交換、熟す前の考えを複数の人々と共有することの重要性などを感じてもらった貴重な場となりました。この「非公式」の活動が、若手の研究者の学会発表、博士論文執筆、学術論文などへと結実する肥料になっているに違いありません。今後も更に大きな花や実へと飛躍してくれることを期待しています。

最後に、CLS後との関わりで、未だ不確定な部分も多いですが、（希望的観測も含め）少し書かせていただきます。CLSは、井上和子先生（現CLS顧問、当時は学長）が研究リーダーとして率いて下さった、1996年～2001年の5年間にわたる理論言語学を基盤としたCOEプロジェクトを受けて発足しました。しかし、言語教育はじめ人文教育に圧倒的な強みを発揮する神田外語大学に附置した研究機関としては、言語学が21世紀に入って先鋭的に分け入り、今世紀最も注目を浴びる研究分野として発展を続けている「脳科学」「生物言語学」「人工知能」といった学際的な研究を追求することには、限界がありました。むしろ、本大学院の教育・研究と深く関わる、人文学的な個別言語研究、対照言語研究からの言語記述研究と言語理論研究、および、言語教育学研究に的を絞った研究所として活動することを主眼としてきたのです。11年間のSALの

目次を振り返っていただくと分かりますが、また、上記の公的資金による研究課題からも明らかですが、言語教育学関係の活動が年々増えてきています。特に、今世紀初頭に小学校への英語の導入が具体的に検討され始め、日本における言語教育が「文法・訳読、知識獲得教育」から、学習者が「コミュニケーション」で「使う」ことを可能にする「タスク中心」教育へとシフトする中で、国際的にも、EU圏での言語教育の指針としてのCEFR（欧州共通言語参照枠）が整備され、国内的にもそれに言及した「言語能力」判定が英語教育だけでなく日本語教育を含めた他言語教育にも影響を及ぼしはじめ、また、研究領域や手法も、学習理論や認知心理学、統計学の知見と手法、コーパス・大型データベースの成果などを取り込み、言語教育研究環境は急速に変化・発展してきています。CLSの研究活動でもそれが反映されてきました。

そうした言語教育分野の「変化・発展・隆盛」に比べると、言語理論研究（特に、人文学的な見地からの理論研究）分野は、70年代～90年代後半での「圧倒的な勢い」から、よく言えば「成熟した地道な研究」として、厳しい言い方をするなら「分野の動向を左右する画期的進展が限られた」まま進行してきています。それでも、CLSでは、上記で言及した研究会・講演会・ワークショップなどを国内外の研究者を招聘して定期的に開催し、昨年度のCLS10周年記念のイベントは、昨年11月に論文集『70年代生成文法再認識―日本語研究の地平』（長谷川信子(編)、開拓社出版）として公刊するなど、COEに匹敵する研究実績をめざし日々活動して参りました。

神田外語大学は、特に、学部教育においては、学習者のニーズに応えられるコミュニケーション・アプローチをいち早く取り入れ、学内でNative教員と日常的に英語（および、中国語、韓国語、タイ語他の外国語）に触れる環境（ELI、MULC）を整え、学習者の自主学習をサポートする自主学習センター（SALC）を設置し、語学の授業も複数教員が連携したコンテンツ中心に改編するなど、先導的・画期的な言語教育（特に、英語教育）を実施していることで、国内外に広く認知されています。来年度は、本学は開学25周年にあたり、過去四半世紀の言語教育を振り返り、今後の四半世紀に向け、新たな一步を踏み出す年度となります。

CLSの研究組織は、そうした全学的な教育研究の流れの中で、改編されることになります。名称も「外国語能力開発センター（Center for Foreign Language Proficiency (FLP)）」と変更され、これまでは大学院に附置し、大学院の研究と教育の支援が第一義的な目的でしたが、来年度からは、大学自体に附置され、学部教育も含めた（むしろ学部教育への還元が期待される）研究所として再出発いたします。外国語能力は、母語能力の上に成り立ちますから、その判定と開発に関わる研究には、広く「ヒトの言語能力」「母語と目標言語との体系的な相違」の把握が不可欠ですので、COE・CLSで培った言語学の知見が生かされる研究組織となります。また、上述したようにCOE以降積み重ねてきた言語教育研究に関わる知見や動向の把握が、今後の日本における言語教育のあり方を考察する上で重要な指針を与えてくれると思われます。来年度は初年度ですので、研究組織は、まだ小規模で「手探り」での船出となりますが、センター長には長谷川があたり、専任教員として、2011年9月からCLS研究員を勤めている藤巻 一真さん（本学大学院2009年博士号）が着任し、学内の多くの先生方の協力を仰ぎながら、他の研究教育組織と連携しつつ、研究活動を推進して行くことになりました。当座は、CLSでは中心に据えてきた上記(A)～(C)の活動は限られますが、長谷川の理論言語学系の科研も継続中ですし、大学院では独自に研究会や講演会の活動をCOE以前に戻り再開させつつありますので、新組織が立ち上がることで、COE・CLSで培った研究の土壌は、大学全体を舞台にさらに生産性の高い発展へと繋がると信じております。本紀要は「休刊」となりますが、ゆくゆくは新組織の活動もご覧いただける形を考えて参ります。

CLSのホームページは、今後も接続可能な形で残しますので、紀要・報告書の送付申し込みや搭載されている情報などへのアクセスはこれまで通り可能です。必要に応じて、新組織で対応を続けます。また、新組織のホームページも遠からず立ち上げる所存ですので、ご興味がありましたら、5月以降にでも（CLSのWebページにリンクを張りますので）訪れていただければと思います。

11年間（COEプロジェクトを含めれば16年間）継続してきた組織を曲がりなりにも「収束」させるのは、多くの方のご尽力とご協力を得て活動して参りましたので、現時点では、後ろ髪が引かれる思いが強いですが、CLSからの発展として研究を継続する機関として再生されますので、「終わり」は「新たな始まり」でもあります。私共も期待したいと思いますが、皆さまにもご期待いただきたいと思います。

CLS収束にあたり、研究員の神谷昇さんには特別に感謝の意を表したいと思います。6年間研究員をお願いしましたが、その間、小学校英語関係で科研（基盤研究(C)）を研究代表者として率いて下さり、CLSの児童英語関係の研究（SALにも数本の論文が記載）の大きな部分を担っていただきました。その研究の合間を縫って、他の教員の研究やCLSでのイベント開催、「井上ゼミ」の運営、2009年6月に本学で開催された第138回日本言語学会での尽力、そして何より、SALの毎号の編集作業、神谷さんがいなかったなら、CLSの活動はこれほど大きな成果には繋がりませんでした。神谷さんの任期終了がCLS最終年度と重なり、年度末には大変多忙になってしまいました。本当にありがとうございました。今後の新天地での活躍を祈念しています。

CLSには非常勤研究員、研究協力者として日常的にCLSの活動を支えて下さっていた方がいます。ここ数年は、神谷科研とその延長で、町田なほみさん、長谷部郁子さん、には大変お世話になりました。定期的にCLSで研究作業をして下さることで、CLSの活気が増し、院生の研究補助など様々な場面で助けていただきました。お礼申し上げます。

そして、事務補佐員の角田雪絵さん。CLSの発足当初から科研の執行、ホームページの改訂など、常駐してCLS全体の業務を把握してくださっていた前任者（椎名千香子さん）が、昨年度で退職されました。角田さんは、その後を受け、同様の業務を短期間で把握し、今年度末には、複数の科研が最終年度を迎え、同時に、CLS収束の作業が加わり、大変多忙で気持ちの休まらない「1年目」となってしまいました。一つ一つ

確実に処理して下さる着実さ、大変頼りになります。ありがとうございました。そして、新組織でも事務を担当していただけるとのこと、新たに加わる仕事もあるかと思いますが、今年度同様、よろしくお願いいたします。

最後に、井上和子先生。先生がCLSの顧問として背後に控えて下さっていたことが、CLSとその活動の求心力でした。先生のどこまでもお優しい慈愛に満ちた包容力と、とことん学生・若い研究者の考えを聞いて下さる忍耐力、そして、どんなこと・人にも「良い点」「優れた面」を見つけて励まして下さる「ポジティブさ」、そうしたことが、本学の博士号の大きな牽引力となり、私はじめ、教員の研究の背後にありました。新組織に衣替えしても、井上先生の教え、スピリット生き続けます。そして、「井上ゼミ」は新組織でも支援を続けます。ですので、「感謝」は一応の一区切りに過ぎません。今後もよろしくご指導下さいませ。

最後の最後になりますが、大学院には、その教育と研究を支える重要な片輪のつもりで活動して参りましたので格別な思いがあります。今後は、新組織と大学院、両者が切磋琢磨してさらに発展できること、祈念しております。

2012年3月
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

言語学編

藤巻 一真
動作完了の「あげる」と程度副詞の「完全に」に関するノート

本稿は述語の持つスケール構造とそれに関わる程度副詞の共起関係について観察する。特に述語に付加される要素によって程度副詞との共起関係が変化するとするTsujimura 2001 と逆の現象を取り上げる。具体的にはTsujimura において、「ている」が本来「とても」と共起しない動詞に付加されると、それが可能になるという観察に着目し、「とても」と逆の分布をなすとされる「完全に」を取り上げる。そして本来「完全に」と共起しない動詞から「～あげる」の複合動詞を作ると、「完全に」との共起が可能になることを示す。

長谷川 信子
空主語の意味解釈と主題化

日本語では、主語省略は頻繁に観察され、それは広く「主題省略」によると考えられている（久野 1973）。本稿では、「主題」を黒田のCategorical Judgment文の観点から規定し、長谷川 (2007, 2010) にも言及し、命令文主語、一人称主語、随意的解釈主語の省略は主題省略ではない統語操作によると論じ、上田 (2011) で提起された空主語・語彙主語の解釈と互換性、主語と他の要素の主題化との関わりを考察する。文（特に主文）の周縁部（CP）領域の複層構造に、主語と主題に共通する[aboutness] 素性を想定し（Rizzi 1997, 2009）、その素性が主題の移動と関わるとするなら、そうした現象が分析できることを示す。

本多 正敏
分裂節の内部構造再考

本稿の目的は、英語の分裂文（it be XP that ...）の分裂節（that節）を、焦点要素の再構成（reconstruction）、定性効果（definiteness effect）、thatの生起、主文現象の生起の観点から再考し、その構造を明らかにすることである。データの再考から、分裂文は、FPの指定部・補部という構造関係で識別焦点（identificational focus）と存在の前提（existential presupposition）を示し、焦点要素がFP指定部へ直接移動すると主張する。また、分裂節内部では、話題化のような主文現象が適用されないことを示し、Rizzi (1997, 2004)の分離CP仮説に基づき、この特徴を焦点移動の性質から導き出す可能性を探る。結論として、A-bar移動を伴う節構造を捉える上で、分離CP仮説が有用であると述べる。

井上 和子
独立文の条件再考

本稿では、「独立文は主語・時制辞・述語・（補部）を備えていなければならない」という従来の一般的認識に反し、以上のような統語的条件を満たしていない言語表現(不完全文)も、上の条件を満たす標準的な独立文と同じく整った意味を表すことを示す実例を挙げ、言語表現の意味解釈にはヒトに生得的に備わっている言語能力が常に機能していると仮定して初めて意味解釈のメカニズムに迫ることができると仮定する。

不完全文として代表的なものは、「無述語文」（述語を欠いている文）と述語の補語を欠いた文である。後者は潜在的に補語を擁する文、「暗黙項を持つ文」と呼ぶものである。本稿ではこの2種類の不完全文を取り上げる。そして、標準的な独立文にも不完全文にも、普遍的な標準文の統語構造に加えて、述語に備わっている「格の枠」に関する生得的な知識を基にして意味が与えられると考える。本稿ではミニマリズムプログラムの枠組みを用い、併合(merge)により階層構造が生成される。

木川 行央・久野 マリ子

神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化

ラ行音の撥音化は、関東全域はじめ全国に広く見られる現象であるが、神奈川県小田原市の方言では他の方言より多くの環境で撥音化が見られる。本稿では、この撥音化の現象の現状を、多人数調査によって確認した。その結果、小田原市方言では、他の関東方言によく見られる、n音で始まる形式の前だけではなく、他の音で始まる形式が後接する場合にも撥音化すること、そしてこの現象は現在の若い世代においても見られること、その使用には性差があること、その原因として、撥音化した発音に対する意識が関与していることを明らかにした。

KAZUKI KUWABARA (栞原 和生)

Wh-Questions and their Interactions with the Particle To in Nagasaki Dialect

This paper examines the distribution of the particle to and its interaction with wh-phrases in Nagasaki dialect. I show that the particle to, which appears to indicate the interrogative force, is a complementizer with no illocutionary force. It is also demonstrated that the particle to is a counterpart of the complementizer no used in questions in standard Japanese, which I argued is a manifestation of finiteness (Kuwabara (2010a,b, 2011)). I argue that Rizzi's (2001) proposal for positing two types of C heads for wh-phrases can be extended to account for the seemingly puzzling interactions of wh-interrogatives with the complementizer with no interrogative force in Nagasaki dialect.

斎藤 武生

アラン・ダンダスの言語文化論

民俗資料の収集とその分類をめざす伝統的な民俗学に対し、アラン・ダンダスが主張したのは、すでに収集された民俗資料の分析および解釈の必要性であった。この課題に自ら意欲的な取り組んだことが、結果として、数多くのすぐれた業績を生み、新しい民俗学 (folkloristics)の構築に貢献することになった。本稿は、ダンダスのそうした研究のうち、言語表現が関係する民俗の議論を「民俗学者ダンダスの言語文化論」と呼び、その内容と問題点を見ようとするものである。

綿貫 啓子

後置文の意味機能から探る話し言葉の生成のしくみ

会話では、書き言葉には現れない、日本語文法から外れた語順が出現する。本稿では、後置文や倒置文と言われる、述語の後ろに要素が現れる“文”の機能ついて、Rochemont (1986)の主張する「文脈や場面からの間接的・直接的解釈可能性(context-construability)」の観点で分析し、後置される要素が、解釈可能(context-construable = CC)である場合と、解釈不可能(not context-construable = not-CC)の場合に区別でき、それぞれ「話し手の聞き手への配慮」（聞き手指向；<CC>）、「話し手の重要度についての判断」（話し手指向；<not-CC>）として記述できることを示す。後置文の機能を分析することにより、“正しい”書き言葉に整形される前の、話し言葉の生成プロセス、すなわち、人間のリアルタイムな情報処理のしくみが解き明かされる可能性を示唆する。

山田 昌史

状態変化を表す軽動詞「する」：「AをBにする」構文の統語分析

本稿では、軽動詞「する」を述部の主要部に持つ「AをBにする」の形式を持つ構文について、その統語的・意味的特徴を観察し、その特徴を捉えられる統語構造を提案した。この構文は、統語的には二格名詞が軽動詞「する」と結束性を示し、それがヲ格を項に選択する他動詞的な特徴を示し、意味的には使役事象と変化事象を一つの文で表す結果構文と相同の特徴を示すものである。そこで、この構文の統語構造を、Hasegawa (1998)の結果構文の統語構造を礎に、拡散形態論（=Distributed Morphology：Halle &

Marantz (1993)、Marantz (2001)等) から捉え直し、この構文の統語構造を提案し、そこからこの構文の諸特徴が導き出されることを主張した。

鄭 汀

「動詞連用形＋名詞」の複合名詞における動詞の「スル／シタ」形

「動詞連用形＋名詞」によって複合される複合名詞は、その動詞語幹の名詞に対する修飾関係がしばしば「動詞スル形」と「動詞シタ形」の2つに意味解釈できるとされる。しかし、その両者が何によって決まるかについては詳しく言及されたものは少ない。本稿では影山(1996, 2001, 2009)の動詞の意味構造、つまり<行為>→<変化>→<状態>という行為連鎖に基づく意味構造の観点から、主に<変化>→<状態>を表す変化動詞を中心に完了の「シタ」形の形成に関与する動詞の意味概念、そして「スル」形の修飾関係の意味及び後続する名詞との関係を考察する。

言語教育編

長谷部 郁子

児童用英語テキストにおける動詞の項構造と文型

本論では、複数の児童用英語教材における動詞の出現割合について調査し、理論言語学の立場から、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure (LCS)) や統語構造といった道具立てを用い、教材に現れる動詞の性質について考察し、提言を行う。具体的には、児童用英語教材には、活動動詞が多く現れ、かつ第1文型、第2文型、第3文型が多用されていることを指摘し、こうした動詞のLCSはACTやSTATEのみから成る単純なものであり、教材内に出現する表現の統語構造は、多くの場合、単一のVPのみから成る構造に限られることを議論する。最後に、外国語活動のタスクなどを考案の際に、動詞の意味や動詞が現れる文の構造の単純さなどを考慮する必要があると結論づける。

堀場 裕紀江・山方 純子・西菜 穂子・李 榮・田所 直子

語彙知識の多面性はL2日本語読解にどうかかわるか

第二言語 (L2) 学習者の語彙知識の多面性と読解の関係を調べるために、L2日本語学習者65名を対象に、語義テストと語連想テスト、および読解テストを行った。その結果、語義テストと語連想テストの両方で語の頻度の影響が認められた。また、語義テストでは名詞は動詞や形容詞・副詞より、動詞は形容詞・副詞より正答率が高く、語連想テストでは共起関係より上位・下位関係の方が正答率が高いことから、品詞や連想の種類が語の習得のしやすさに影響を及ぼしていることが分かった。さらに、語彙知識の諸要素と読解の間に相関関係があり、語の基本的な意味に関する知識も語と語の意味的關係に関する知識も共に重要であるが、中でも語の共起関係に関する知識が読解を説明する最も強い要因であることが明らかにされた。

鎌田 倫子・中河 和子・後藤 寛樹

日本語教育プログラムにおけるエンパワメント評価の適用は必然である

本稿でエンパワメント評価を日本語教育プログラムに適用する事の是非を検討した。准学校型と位置付けられるS日本語プログラムは、地域型日本語プログラムと共通する特徴や問題点を持っている。近年、地域日本語教育では、活動を取り入れた相互学習による日本語教育や保障教育としての日本語教育の必要性が提案されている。S日本語プログラムの地域日本語プログラムと共通する問題点にはプログラム当事者のエンパワメントが必要とされ、エンパワメント評価により当事者が評価力を身につけ、改善につなげることが重要である。エンパワメント評価により地域プログラムの方法論を取り入れ、准学校型プログラムに適した日本語教育モデルの構築を目指すことは必然といえる。

神谷 昇

児童用英語教材に見られる構文について

本稿は児童用英語教材で用いられる「構文」について理論言語学の観点から調査した結果を提示し、その特徴を考察することを目的とする。より具体的には、国内で発行されている4種の教材に出現する「構文」を調査した結果、(i) wh疑問文やyes/no疑問文が多用されること、(ii) 時制がほぼ現在に限られること、(iii) canなどごく一部の助動詞しか出現しないことが判明した。そして、疑問文が多用されるのは、相手の発話を理解し、英語に慣れ親しみながら相手とのコミュニケーションを図ることを目的としているからであり、さらに、時制が現在に限られるのは、児童が眼前の出来事や自分自身の能力を「現在」に関わりがあるもの

として捉え、それを児童自らが発話することでコミュニケーションを図ることができるように設計されているからであると示唆する。

町田 なほみ

児童英語教育で扱われる機能語

小学校英語活動では、「コミュニケーション能力の素地の育成」を目標として掲げているにも係わらず、文や句を作る際に不可欠な要素である機能語に関する研究はほとんど進められていない。本稿は、児童英語教育で扱われる国内外の教材に出現する機能語の種類と教材間の重複度を分析した上で、それらの用法から導入される句・文レベルでの表現と児童英語教育で扱われるコミュニケーションの形を探ろうとするものである。そして、本調査の結果を小学校英語教育で掲げられた目標遂行のためにどのように活用できるか論じ、今後の英語活動をより有意義なものとするための基礎資料の一つとなることを目指す。

眞鍋 雅子

異なる社会的場面タスクが計画時間に与える影響－日本語学習者の「依頼」と「断り」の発話行為から

本調査は、Taguchi(2007)の研究の一部を日本語学習者に当てはめ、習熟度の異なる日本語学習者4名を対象に行った事例研究である。日本語学習者がタイプの異なる語用論的タスクを行った時、タスクタイプと習熟度が学習者のL2口頭産出の計画時間にどのように影響するのかを調べた。タスクは2種類の社会的場面タイプ(PDR-lowタイプとPDR-highタイプ)のタスクであり、4名の日本語学習者は各タスクでロールプレイにより「依頼」と「断り」の2つの発話行為を産出した。学習者のタスクを行う前の計画時間を測定し、計画時間に焦点化した内省を分析した結果、学習者の個人的要因であるタスクの馴染み度・学習者にとって共感しにくいタスクの場面設定・日本語の敬語使用に対する心理的負担が、学習者の計画時間に影響した可能性が示唆された。